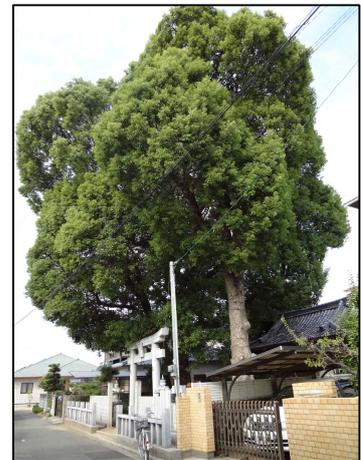




<概要>

和泉北2丁目に、素鷲神社があります。明治3年に伊予豆比古命神社（いよずひこのみことじんじゃ）の末社（まっしや）となり、素鷲神社という名前にしたそうです。この神社では、健速須佐之男命（たけはやすさのおうのみこと）や弁財天王をおまつりしています。境内には立派なクスノキが育っており、遠くからでもその場所が分かります。昭和54年には、立派な鳥居が完成しました。

※ 末社・・・大きな神社と関係の深い小さな神社



境内には、塩ヶ森井水八幡宮（しおがもりいすいはちまんぐう）もおまつりされています。以前は、現在素鷲神社がある場所より南へ100m行ったところ辺りにあり、八幡田や井戸もあったそうです。ところが、この八幡田を処分したところ、次の年に病気が流行し、人々は八幡様のたたりとおそれました。そこで、この素鷲神社に社（やしろ）を移しておまつりしたと伝えられています。

<天王様と天王祭>

この神社は、天王様（てんのんさん）とよばれ、親しまれています。それは、二つの天王様に関係しています。

この素鷲神社でおまつりしている弁天様という女性の神様は、弁財天王（べんざいてんのう）とも呼ばれます。

また、素鷲神社と名付けられるまでの明治以前には、牛頭天王（ごずてんのう）という神様をおまつりしていました。昔は田畑を耕すのに牛や馬が必要で、家族同様に大切にしていました。その牛や馬の無事息災を願い、日頃の感謝の気持ちを表すためにおまつりしていたのだそうです。

※無事息災・・・病気やけがなどの災難がないこと

毎年7月14日には天王祭（てんのんまつり）があり、この日は、一日農作業を休み、お弁当を持って集まり、一日涼みながら休んでいました。

子どもたちは、米や野菜を「お宿」と称する世話役の家に持ち寄り、握り飯を作って素鷲神社に集まりました。夕方には境内で子ども相撲を行い、奉納していました。三人抜きや五人抜きをした子どもには、ノートや鉛筆の賞品が出ました。夜になると神楽殿（かぐらでん）に蚊帳（かや）をつり、その中で怪談話を聞いたり肝試しをしたりして楽しく過ごしました。この日だけは、子どもたちの外泊や夜ふかしも許してくれました。昭和30年頃までは、このような習慣が残っていたようです。

2月には祈年祭、5月5日には春祭り、11月23日には感謝祭を、椿神社から神官をお招きして行っています。



＜荒神社との関係＞

明治41年には、政府の方針により、荒神社も素鷲神社に合祀されました。その後、荒神社は現在の場所に移転復帰しましたが、いつ頃行われたかははっきりしません。（大正9年頃に移転復帰したとも言われています。）

参考文献

「和泉郷土誌」（昭和62年 和泉郷土誌編集委員会）